

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

撰関家領島津荘の成立と南島交易

永山修一

はじめに

皆さん、こんにちは。永山です。よろしくお願い致します。過分な紹介を受けましたが、まず、私のことを少しだけ紹介しておきます。一九八〇年に大学を出て、すぐに鹿児島県のラ・サール学園に赴任しました。

大学のときには行基という坊さんの研究をしていましたが、せっかく南九州に赴任したので、奈良時代ころに南九州に住んでいた隼人と呼ばれる人々の研究をすることにしました。当時、ラ・サール学園には立命館大学出身の中村明蔵先生という隼人研究の第一人者がいましたので、その落穂拾いをさせてもらいました。

ただし、落穂拾いばかりをしても仕方がありません。南九州では、平安時代初期の八〇〇年ぐらいまでの隼

人に関する史料がたくさんあります。また、十二世紀以降の島津荘や島津氏などの史料も豊富に残っていますので、中世の武士に関する研究が大変盛んです。

しかし、ちょうどその間に位置する平安時代の南九州の歴史は、深く研究されていない状況でした。そこで、その時代の史料を少しずつ見ていたら二つの面白い史料に行き当たりました。

一つ目は、九九七年に九州の各地に南蛮人が襲来し、翌年、大宰府は貴駕島に、「南蛮人を追討せよ」という命令を出したという史料です。この貴駕島の問題は面白いと考えました。

二つ目は、恐らく一〇二八年のことになると思いますが、平季基すえもとという大宰府の役人が大隅国司の屋敷、大隅国府、さらには地元の有力者の屋敷を焼き討ちした事件の史料です。これについても面白い記事だと思って調べました。

二つとも一九九〇年代に論文にまとめましたが、この二つの事件は深く関わりがあることに後々気付くことになります。

また、南島での考古学的な調査が急速に進み、南の島の実態もいろいろと分かってきましたので、本日は、「摂関家領島津荘の成立と南島交易」という題でお話します。島津荘の展開は、鎌倉時代と中世の武士の史料とを併せていろいろと分かることが多いですが、本日は島津荘ができたころの十一世紀のことを中心にお話します。

都城市立の都城島津邸という博物館は、二〇二三年に「島津荘誕生千年記念展」を開催し、『島津荘〜平安・鎌倉期における南九州と都城』(都城島津邸編、都城市教育委員会都城島津邸、二〇二三年一〇月発行)という図録を作りました。本日の話では、この図録からも写真その他を幾つか使います。

写真1は、都城市にある祝吉御所跡いわよしと呼ばれる所で、島津氏初代の島津忠久が屋敷を造ったとされている場所で

す。島津荘というと、すぐに島津氏と結び付けて考える人もいますが、実は、島津荘と島津氏のつながりは、一一八五年、源頼朝が平家を倒した直後に惟宗忠久これむねという人物が島津荘の下司に任命されたことから始まります。忠久は、近衛家にも仕え、頼朝の御家人でもあった人物で、島津荘の下司になったことで、のちに島津氏を名乗ることになります。ですから、祝吉御所が造られたとされたのは島津荘が成立して一五〇年以上後の話になりますが、地元では大切にされている場所です。

数年前、この場所のすぐ近くからかなり大きな発掘成果が挙がりましたので、これものちほど紹介します。

図1は「島津荘の分布」(小川弘和「摂関家領島津荘と「辺境」支配」『中世的九州の形成』

高志書院 二〇一六年)です。

南九州には、近衛家を中心に支配している島津一円荘と、半分は摂関家、半分は国衛こくがが支配し



写真1 祝吉御所

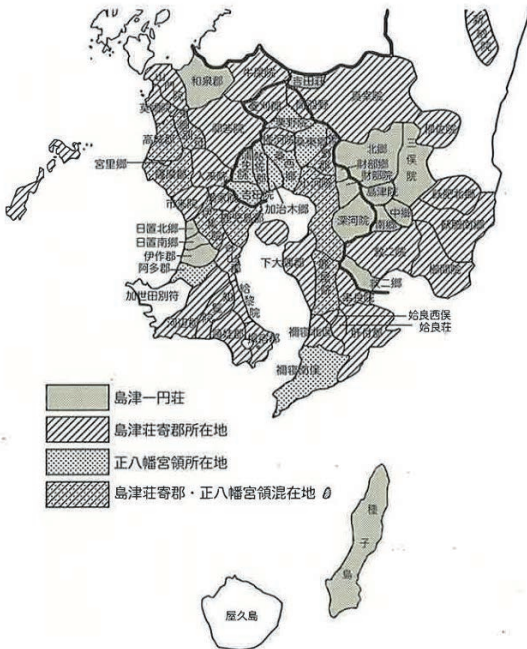


図1 島津荘の分布 (小川2016)

ているという寄郡（よりごおり、あるいは、よせごおり）、島津荘と南九州で最も大きな大隅正八幡宮という神社の所領である大隅正八幡宮領が重なっている場所（島津荘寄郡・正八幡宮領混在地）がありました。

ここで島津荘の概要を説明しておきます。島津荘自体は一〇二〇年代の終わりころに始まったと思いますが、そのあとの数十年の様子はよく分かっていません。

その後、島津荘は、十二世紀に藤原忠実が摂関家のトップだった時代に拡大していったと言われています。藤原忠実は、大隅国司に反発する在地領主たちに働き掛けて、大隅国内で島津荘寄郡を拡大し、十二世紀初期、串良院・肝付郡域を島津荘寄郡とし、曾野郡・小河院内に島津荘寄郡を設置しました。さらに禰寝北保・鹿屋を島津荘寄郡域化し、財部院・深河院内、種子島内で島津荘寄郡域化を推進、帖佐郷が藤原忠実の所領となりました。

忠実は、その娘の鳥羽天皇への入内問題で白河上皇と対立し、保安元年（一一二〇年）内覧を停止され、事実上、失脚しました。忠実失脚中の時期、大隅国内の島津荘寄郡域化の動きは鈍化したようです。白河上皇の死後、鳥羽が院政を始めると、一一三二年、鳥羽上皇の支援で、忠実は内覧になり政界に復帰しました。これによって、島津荘寄郡化の動きが再び進んでいくことになりました（日隈正守、二〇一四「大隅正八幡宮領の形成過程」『古代文化』第六十六巻第二号（通巻五百九十七号））。

十二世紀後期、島津荘は、事実上、平家が支配することになります。平清盛の娘盛子が摂関家のトップ近衛基実と結婚し、その基実が一一六六年に亡くなり、嫡子基通は七歳と幼少だったために、事実上、盛子の父親である清盛の支配下に入ったのではないかとされています。一一八三年段階で、島津荘留守職は平盛俊（譜代の重臣）であり、一一八〇年、平忠度は薩摩守になり、その目代には平信澄（肥前平氏一族、阿多忠景の女婿）が就いています。また、大隅国では、有力な国衙在庁建部氏を被官化しています。

摂関家領島津荘の成立と南島交易

一一八五年に壇之浦で平家が滅びたあと、近衛家に仕え頼朝の御家人でもあった惟宗忠久が、幕府・領家によって、島津荘下司職のち惣地頭職に補任され、一一九七年に、大隅・薩摩国守護職、さらに日向国守護職に補任されました(日隈正守、二〇一四「大隅正八幡宮領の形成過程」『古代文化』第六十六卷第二号(通巻五百九十七号))。

南九州の薩摩・大隅・日向の三方国の土地の領有状況については、一一九七年(建久八年)に作られた図田帳が残っています。これによって、どこにどういう荘園があったか、それを誰が持っていたかが明らかになっています。

所領ごとに細かいデータも載っていますが、ここでは、それを大まかにまとめて表1を作りました。島津一円荘の面積は、日向が一九四八町、大隅が七五〇町、薩摩が六三五町です。これに寄郡の数などを合わせると、建久八年(一一九七年)の段階で島津荘は合計七五五四町余りあったこととなります。

国衙領、大隅正八幡宮領、八条院領など、ほかにもいろいろな荘園がありますので、それを全部合わせると、三方国の

日向		大隅		薩摩	
種別	面積(町)	種別	面積(町・段・歩)	種別	面積(町・段)
島津一円荘	1948	島津一円荘	750.0.0	島津一円荘	635
島津荘寄郡	1817	島津荘寄郡	715.8.180	島津荘寄郡	1689.1
宇佐宮領	2006	正八幡宮領	1296.3.120	没官領	820.6
国富一円荘	1436	不輸	500.5.120	国領	211
国富荘寄郡	120	応輸	795.8.0	寺社領	655
前斎院領	278	国領	255.3.300	安楽寺	154.4
弥勒寺領	115	公田	106.0.180	弥勒寺	196.1
妻万宮領	98	不輸(経講田)	133.3.120	正八幡宮	225.3
その他	241	府社	16.0.0	府領社	79.2
合計	8064	合計	3017.5.240	合計	4010.7

建久八年(1197)の段階で、島津荘は合計7554町余

表1 建久図田帳に見る日向・大隅・薩摩

面積の総計は一五〇九七町になります。そのうちの七五四町余が島津荘ですので、薩摩、大隅、日向の三方国のほぼ半分が島津荘になっているということになります。島津荘が日本で最大の荘園だということは大変有名な事実ですが、この数字は、一一九七年までに少しずつ増えていった結果、こうなったということです。

今日は、日向国から始まった島津荘が大隅や薩摩に広がりつつあった頃のことを中心に話します。

一・島津荘成立の基本史料

島津荘成立の基本史料について見ていきます。実は、島津荘がいつできたかということについては同時代史料がありません。いずれも島津荘ができてから二百年近くたった十三世紀の史料です。

まず正応元年（一二八八）あるいは正応四年（一二九一）のものだとされている「島津荘荘官等申状」（薩藩旧記雜録「前編卷九」）には、「島津本庄は、万寿年中に無主荒野の地を以て開発せしめ、庄号して宇治関白家に寄進せしめて以降、長元年中伊勢太神宮神告に依り・宇佐八幡を奉崇す。庄号以降二百余歳は、彼の寺社造営の外、余事無の処」とあります。ここに見える宇治関白家は藤原頼通のことです。島津荘は「無主荒野の地」にできたという話になっています。「万寿年中」とは一〇二四年から一〇二八年、「長元年中」とは一〇二九年から一〇三七年のことです。

次の建暦三年（一二二三年）四月『僧智恵愁状案』（「長谷場文書」も十三世紀の史料です。一部分だけを読んでみると、「御庄建立主平大監だいげんすえもと季基朝臣の御息平五大夫兼かねすけ輔朝臣の時」と書いてありますので、大監の平季基が島津荘を開発したということです。大監は、この人の官職で、大宰府の三等官にあたります。長官が帥すぢ、次官が大

式・少式、判官が大監・少監です。

三つ目の史料は、『三侯院記』です。これがまとめられたのは江戸時代ですので、かなりのちの時代にできた史料です。これには、「一、神柱大明神。右、万寿三年（丙寅）正月廿日に平朝臣平大監季基卿、当地を領し、移住の日に崇ふ所也。」とあって、都城の中心的な神社である神柱大明神は、万寿三年（一〇二六）に平季基が勧請したという内容になっています

四つ目の史料は『延喜式』兵部の諸国駅伝馬条です。ここで島津荘の「島津」とは何かということについて話しておきます。図2に、南九州の駅路をあげました（永山修一『隼人と古代日本』同成社、二〇〇九年）。駅路は古代の官道です。古代は中央集権的な体制を取っていて、都の命令を地方に伝える、あるいは地方の情報や都に伝えるために、今で言う高速道路が造られていて、これに十六キロごとに駅を置くという規定がありました。

「延喜兵部式」には駅の名前を列記した部分があり、日向、大隅、薩摩の三方国の部分を抜き出すと。「薩摩国 駅馬 市来、英祿、網津、田後、櫛野、高来、各五疋



図2 南九州の官道（永山2009）

司一年の給物は稲三万六千余束に准じ、其の嶋の貢調は鹿皮一百余領にして、更に別物無し。有名無実、多損少益と謂ふ可し。右大臣宣すらく、勅を奉りて宜しく利害を勘へて言上すべし、者れば、南腹森々、国無敵無し。損有りて益無きこと、一に符旨の如し。須く嶋を停めて大隅国に隸くべし。其の課口を計るに一郷に足らず、其の土地を量るに一郡に余る有り。能満を馭諷に合わせ、益救を熊毛に合わせ、四郡を二と為さば、事に於て便なるを得ん。者れば、聖帝、枢に登るに、事世を済むことを期し、明王、政を布くに、理時に適ふことを貴ぶ。臣ら商量するに、昔、漢の元帝、賈捐の言を納れて珠崖郡を罷む。前史以て美談と為し、後世其の英烈を称ふ。国を建て疆を置き、分野無きに非ずと雖も、民を郵急を救ひ、列郡を棄つ。況や冥海の外、費損此の如きをや。加以往還の吏、漂亡する者多く、運送の民、蕩没する者少なからず。益無きの地を守るに、有用の者を損す。之を政典に求め、深く物議を迂すに、伏して望むらくは、件に依りて停め隸け、以て辺弊を省かんことを。伏して天裁を聴かむ。謹み以み申したまふことを聞こしめせと謹み奏す。

天長元年九月三日

ちようどその頃、大宰府管内では疫病や飢饉がつづいており、財政的に非常に厳しい状況になりました。これは高校の教科書に出てくるような話ですが、そのために特定の田を割き取って直接経営をするという公営田制を導入することになります。

多櫛嶋の嶋司の給料その他は大宰府が支援していましたが、公営田制導入の結果、財源が大幅に減ってしまおうということ、多櫛嶋を廃止することになりました。そして、大隅国に編入することになりました。

そのあと、種子島や屋久島がどうなったのかについては、史料がほとんどないものですからよく分かりませんが

した。これに関して、現在早稲田大学の田中史生さんが「日本三代実録」の元慶二年（八七八年）四月二十二日条に注目しました。それは「散位外従五位下春日朝臣宅成を大隅守と為す。」という記事です。

田中史生さんは、古代の中国や朝鮮との対外関係史に詳しい人ですので、多分、ぴんときたのだらうと思います。春日宅成は、入唐交易使の経験があり、渤海からやってくる使いに頻繁に対応していました。つまり、海外情報とか、よそからもたらされる品物に関して非常に詳しく、造詣の深い人間だったということになります。そういう人物がわざわざ大隅守に任命されているということは、南の島との交易の窓口の役割を期待されていたのではないかと、田中さんは考えました（田中史生『国際交易の古代列島』角川選書 二〇一六年）。それは、多分、そのとおりだと思います。

ii. 平安中期の南蛮襲来事件―キカイガシマの登場

そうした中で、南蛮襲来事件が起きました。『日本紀略』長徳三年（九九七年）十月一日条には、「旬しゆん。天皇、南殿に出御す。時に、庭立奏の間、大宰の飛駅参入して云く、南蛮管内諸国に乱入し、人・物を奪い取る。奏樂の後、諸卿の事を定め申す」とあります。九九七年十月一日、朝廷で儀式をやっている最中に大宰府から緊急の使いがやってきて、南蛮が大宰府管内諸国に乱入して人や物を奪い取ったと報告しました。

この儀式には藤原実資さねすけや藤原行成ゆきなりも参加していましたので、実資の『小右記』という日記や、行成の『権記』という日記の中にも関係する記事が出てきます。

ここでは『小右記』の記事を挙げておきます。今、大河ドラマ「光る君へ」ではロバートの秋山竜次さんが藤原実資を演じていて、日記を一生懸命つけるという話が出てきます。実資は非常に細かいことを日記に記していて、

大宰府が送ってきた報告書を写し取っています。『小右記』長徳三年十月一日条は、次のように記しています。

大宰府言上の解文等を下し給ふ。諸卿をして定め申さしむ。奄美島者、船に乗り兵具を帯び、国島の海夫等を掠奪す。筑前・筑後・薩摩・壹岐・対馬、或は殺害し或は放火し、人・物を奪い取り、多く海上に浮ぶ。

また当国人処々に於て合戦を為すの間、奄美人の矢に中るもの亦其の数有り。但し当国人多く奪ひ取らるること已に三百人に及ぶ。府の解文に云く、先年奄美島人來り、大隅国の人民四百人を奪ひ取る。(下略)

これによると、「南蛮」ではなくて「奄美島人」という書き方をしています。筑前、筑後、薩摩、壹岐、対馬が襲撃され、殺されたり、拉致された人が三〇〇人にも及んだと書いています。

そして、これは国司の怠慢だとは思いますが、大宰府からの解文によると、先年奄美島人が襲来し、大隅国の人四〇〇人を奪い取っていったとあることから、既に四〇〇人が拉致されていたのに、それを報告していなかったということですから、このことから、この時期、南の島の人々が九州の沿岸を襲撃し、人々を拉致する事件が何度も起こっていたことが分かります。

次に、『日本紀略』長徳四年(九九八年)九月十四日条には、「大宰府言上す、貴駕島に南蛮を捕え進むるの由を下知すと」とあり、襲来事件の翌年にあたる九九八年、大宰府が貴駕島に南蛮をやっつけるように命令を出したという記事があります。これはキカイガシマという名前の初見記事です。

さらに、『日本紀略』長保元年(九九九年)八月十九日条には、「大宰府、南蛮の賊を追討するの由を言上す。」とあり、九九九年に南蛮追討を実行したことが報告されています。これは復命にあたります。

こう考えると、貴駕島には、大宰府の命令を受けて、それを実行に移す人たちがいたと考えざるを得ません。ただ、私が、一九九三年に「キカイガシマ・イオウガシマ考」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集 下』

吉川弘文館）を書いた時点では、貴駕島がどういふ島なのかはよく分かりませんでした。

その時は、ない知恵を絞り、大宰府と同じようなものが出土していたら、そこが貴駕嶋と言えるのではないかと考えました。当時、最も高級な焼き物の一つだった中国産の越州窯系青磁は全国各地で出土していましたが、一番南で出土したのが種子島でした。そこで、私は、多嶺嶋という行政機構は廃止されても、そこに大宰府の役人などが派遣されていて、そこを「貴駕嶋」と呼んでいたのではないかと、三十年前は考えていました。しかし、のちにこれは間違いだと考えるようになりました。

もう一つ、「キカイガシマ」の「キ」という字は「貴族」の「貴」が用いられています。また、一一一年の史料では「喜」という字が使われています。「キカイガシマ」というと、恐らくは「鬼」のほうが一般的ではないかと思えますが、これもまた南の島に関するイメージの変化として、「王朝貴族垂涎の品々を産する地域」としての「貴」のプラスイメージから、のちに「鬼」のマイナスイメージへの変化が生じています。

次の史料は、十一世紀に成立した藤原明衡の『新猿楽記』という作品の一部です。

八郎真人はちろうまことは商人の主領也。利を重くして妻子を知らず、身を念じて他人を顧みざる也。一を持ちて万と成し、壤つちくれを搏うちて金と成す。言を以て他の心を誑たぶらかし、謀を以て人の目を抜く一物也。東は俘囚之地に臻いたり、西は貴賀之島に渡る。交易の物、売買の種、称数す可からず。唐物には（中略）、本朝物には、緋襟・象眼・纏綱・高麗軟錦・東京錦・浮線綾・金・銀・阿古夜玉・夜久貝・水精・琥珀・流黄・白鋳・銅・鉄・縑・蟬羽・絹・布・糸・綿・纈纈・紺布・紅・紫・茜・鶯羽・色革等也。

皆さんの世代だと「モーレッツサラリーマン」という言葉は耳なじみがあるかもしれませんが、『新猿楽記』の中に出てくる八郎真人は、それに近い「モーレッツ商人」です。家族のことをほったらかしにして利益を追求します。

「東は俘囚之地に臻り、西は貴賀之島に渡る」と書かれています。「俘囚之地」とは東北地方を指すのだろうと思いますが、そこから西は貴賀島までを股に掛けて商いをしていくということです。貴賀島は西の境界領域とされています。また扱う商品は大きく唐物と本朝物に分けられて、本朝物の中には夜久貝や流黄が入っています。夜久貝と流黄については、あとで触れます。

次は、『左経記』寛仁四年（一〇二〇年）閏十二月二十九日条です。『左経記』は参議兼左大弁源経頼の日記です。これには寛仁四年（一〇二〇）閏十二月二十九日条に、「南蛮賊徒薩摩国に到り、人民等を虜掠するの由なり。（中略）仰せて云く、年改むるの後、慥に追討すべきの由、大宰府に官符を賜はるべし。」とあることから、一〇二〇年にも南蛮人がやってきて人々を拉致する事件が起っていることが分かります。

このように明確なものではありませんが、『調所氏家譜』にみえる天喜二年（一〇五四）二月二十七日付「大宰府符写」によれば、一〇五四年に大宰府の長官が管内諸国の神様の位を一階ずつ上げるといふ措置を取っています。残念ながら大隅国の神名・神位の一部しか残っていませんが、その際に、「長徳三年の例に倣ふ」と書いてあります。長徳三年とは南蛮襲来事件が起こった年です。恐らく、その年に大宰府管内の神様の位を一つずつ全部上げるといふ措置を取ったと思われる。長徳三年の例に倣い、一〇五四年にも同じ措置を取っていることから、この年にも南蛮襲来事件が起こった可能性があると考えています。ですから、南蛮襲来事件は何度も起こっていたと考えられます。

『小右記』長元二年（一〇二九年）八月二日条に「大隅国に住む良孝朝臣、色革六十枚・小手革十六枚・赤木二切・檳榔三百把・夜久貝五十口を進む。」という記事があります。一〇二九年、大隅の藤原良孝という人物が色革、小手革、赤木、檳榔、夜久貝という品々を藤原実資の元に送っています。これらを送ったことは島津荘の成立と密接

に関わると考えていますので、のちほど見ていきます。

色革と小手革は革製品で、大宰府管内ではよく作られていたものだそうです。赤木、檳榔、夜久貝は、実は南島産品です（山里純一、二〇一二年「古代の琉球弧と東アジア」吉川弘文館）。

写真2の赤木は、沖縄の那覇市金城町大アカギ群生地のもので、こういった木で、琴、親王の位記を示す品物、刀や小刀のさやを作ったそうです。

檳榔については、私が宮崎県出身なので、檳榔で有名な青島の写真3を示します。以前、ここに行ったときに、落ちていた檳榔の葉をもらって帰りたくてお願いしたところ、「これは天然記念物ですので、落ち葉すら外に持ち出すことはできません」と断られた覚えがあります。檳榔は、牛車の箱車をふくための材料になります。それは「檳榔毛の車」あるいは「毛車」と言われ、四位以上の人しか乗れない超高級車です。

夜久貝について、正倉院の螺鈿紫檀五弦が琵琶有名です。琵琶の白い部分は夜光貝螺鈿とされています。正倉院の円鏡平螺鈿背の裏側の白い部分も夜光貝です。また、正倉院に残っている半月の形や丸い形に加工された夜光貝は、何に使われていたかは分かりませんが、布か何か縫い付けてあったのではないかとされています。さらに、正倉院には夜光貝の貝殻そのものも伝えられていますので、夜光貝は奈良時代から使われていたということなのです。

春日大社に伝えられている国宝の沃懸地猫雀文螺鈿毛抜形太刀拵は十二世紀のもですが、細かい装飾は全部、



写真3 青島



写真2 赤木

夜光貝をはじめ込んであります。サントリー美術館が持っている沃懸地浮線文蒔絵螺鈿手箱は、十三世紀のもので、十一世紀に造られた平等院鳳凰堂の内陣にも夜光貝螺鈿が使われていますし、十二世紀に造られた中尊寺金色堂の柱の白い部分は全て夜光貝を使っています。ですから、夜光貝は、調度品、螺鈿の材料として大変重要なものでした。

中里寿克さんの螺鈿技法の変遷の研究（『古代螺鈿の研究』上・下（『国華』一一九九号・一二〇三号、一九九五・一九九六年））を参照すると、十世紀から十一世紀になる頃に平麿地螺鈿や蒔絵螺鈿という技法が増えています。また十一世紀から十二世紀にかけては沃懸地という新しい技法が出てきます。新しい技法が出てくると螺鈿需要が増えるのは、卵とニワトリの議論で、どちらが先なのかはよく分かりませんが、少なくとも密接な関係があるだろうと考えられます。

十世紀から十一世紀というのは、西暦に直すと、ちょうど一〇〇〇年頃です。夜光貝に対する需要が一〇〇〇年頃に非常に増えて、一一〇〇年頃には、さらに増えていることは事実だと考えられます。

『小石記』長元二年（一〇二九）八月二日条の大隅国に住む藤原良孝による実資への進物記事では、夜光貝のことを「夜久貝」と呼んでいましたが、「倭名類聚抄」は、「夜久島（現在の屋久島）で採れるから夜久貝だ」と言っています。実は、種子島でも若干採れるようですが、そこが北限です。一番たくさん採れるのは奄美大島や徳之島です。つまり、南島、奄美諸島などでたくさん採れる貝が極めて大量に必要な状況が生まれてきたということです。中尊寺金色堂では千個のオーダーで夜光貝を使っているだろうと考えられています。当時のトップクラスの貴族でも、せいぜい四、五〇個レベルでしか手に入れていないということですから、逆に、平泉の奥州藤原氏の財力のすごさは、そこからも分かります。

iii. 城久遺跡群の登場

次に城久遺跡群について紹介します。九州から台湾までの地図で見ると、ちょうど中間地点に沖縄があり、沖縄と鹿児島のはば中間ぐらいに奄美大島があります。奄美大島の東隣に喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）という隆起サンゴ礁の島があります。

喜界島では防衛省情報本部通信所の建設が予定されているということで、二〇〇二年から事前の発掘調査が始まりました。そのあとは大型の畑地整備の事業が行われ、発掘調査や整理作業が十年近く続きました。ここでは、八つの遺跡（半田・前畑・大ウフ・赤連・小ハネ・半田口・山田半田・山田中西）からなる広大な遺跡群が発掘されました（二〇〇二年～二〇〇九年に調査。標高九〇～一六〇メートルの海岸段丘上に立地し、調査面積は約十三万平方メートル）。その成果を大ざっぱにまとめると、建物跡は復元できたものだけで三百棟以上、古代末～中世初期土坑墓の四十二基、前畑・大ウフ・小ハネ・山田半田・山田中西で鍛冶関連遺構が検出され、大ウフでは砂鉄で充填されたピットが約二十基集中しています。遺跡群としてはⅠ期（九世紀～十一世紀前半）、Ⅱ期（十一世紀後半～十二世紀）、Ⅲ期（十三世紀～十五世紀）に分けられます。なお、城久遺跡群は、二〇一七年に城久遺跡の名称で国史跡に指定されました。

写真4は私が飛行機の中から撮ったものですが、右上の部分にリーダーサイトがあり、一帯が城久遺跡群です。そこからたくさんさんの輸入陶磁器が出土しました。「第Ⅰ期（九世紀～十一世紀前半）」の出土遺物は七〇％は島外からの搬入品であり、量は少ないが、越州窯青磁、初期高麗青磁、大宰府でしか出土しないような灰釉陶



写真4 城久遺跡群

器などがたくさん出土しました。

三十年ほど前、貴駕島はどこにあるかと考えたときには、「越州窯青磁が出土しているから、貴駕島は種子島だろう」と思っていました。しかし、城久遺跡群の調査によって、それをはるかに超す量の輸入陶磁器が喜界島から出土し、しかも、名前も一緒だということで、南蛮追討を命じられた貴駕島は今の喜界町喜界島だろうと考えるに至りました。

図3は城久遺跡の総括報告書のものの一部変更したものです。実は、城久遺跡群は十一世紀後半から最盛期です。この話は本日の最後にもう一度採り上げます。

三、島津荘成立前史

さて、南島の動きを大体見たところで、南九州の話に戻ります。島津荘成立前史について見ていきます。南九州のこの辺りの時代については、野口実先生が鹿児島にいらしたときに、『都市史』にも参加していただき、新しい展開をいろいろと示していただきました。

i. 日向国の受領支配

『今昔物語集』巻二十九に「日向守 書生を殺すものがたり第廿六」という話があります。かいつまんでいうと、

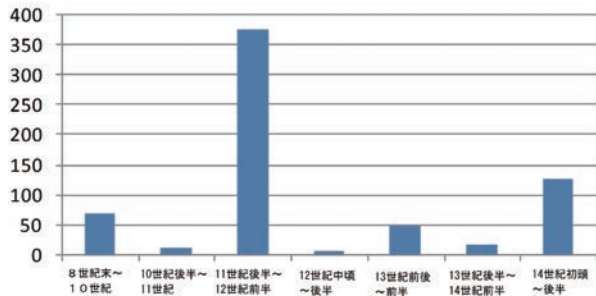


図3 城久遺跡の時期別遺物の数量

日向守某は、新任が来るまでの間に、交代用の書類を書生に捏造させます。書生は身の危険を感じましたが、逃げられませんでした。やがて書類が整うと、日向守は都から引き連れてきていた郎党たちに書生を捕らえさせて射殺させました。その間には、「年老いた親に会わせてほしい」と書生が郎党に懇願するといったやりとりがありますが、非情で残忍な日向守の姿が描かれています。野口先生は、「この日向守は藤原保昌ではないか」とおっしゃっています（野口実「島津荘の成立」『都城市史 通史編 自然・原始・古代』一九九八年）。南九州においても受領支配が展開している様子が見て取れます。

ii. 大隅国内の動向

次に、隣の大隅国の動向を見ていきます。『北山抄』巻十 吏途指南 古今功過定」という史料が注目されます。これは今の大河ドラマにも登場している藤原公任きんとうがまとめた有職故実書で、その中に以下のような弓削仲宣ゆげのなかのぶという大隅守の話が出てきます。

大隅守仲宣、彼の国の代々里倉の物、前司任中に見物に廻成するの由を陳ぶ。仲宣の勘状に云く、見物を称すと雖も、皆是負名なり。寄徴すべきに非ずと云々。然して前司の状を執るに終る。見物を以て受領すと謂ふべき也。而して後司交替の時、代々の例に任せて、里倉を以て分付てへす者と。仍りて過と為すべきの由、諸卿之を定む。伊周卿過と為すべからざるの旨を執し、数日定め畢らず。遂に一定すること無し。仲宣卒去し畢ぬ。彼卿知らずして執すれば賢に非ず。知り乍ら猶之に執すれば不忠也、当時の英雄此を何如せんや。ここでは国司交代に際して里倉負名りそうふなまうが問題になっています。九州大学にいらっしやった坂上康俊さんによりますと、出挙すいこは農民に稲を貸し付けて、本来は貸し付けた分と利子の両方を取り立てますが、それがうまくいっておら

ず、貸し付けたものは地域に設置されている里倉に置きつ放しにしており、利子だけはきちんともらっているということにして、財政運営がうまくいっていないことを糊塗するような、ごまかすような仕組みが取られていたということです（坂上康俊「負名体制の成立」『史学雑誌』第九十四卷第二号 一九八五年）。弓削仲宣は、これに関して勤務評定で合格がもらえなかったという話になります。

『宇治拾遺物語』卷九第六話『歌を詠んで罪を許される事』にも大隅守の話が出てきます。大隅守は、怠慢な郡司を懲らしめるため、呼び出して咎で打とうとします。ところが、あまりに年老いているので哀れを催して、何とか許してやろうとします。その際に、いろいろ考えた揚げ句、「歌を詠めるか」ときいたところ、その郡司が「年を経て 頭の雪は つもれども しもと見るにぞ 身は冷えにける」という歌を詠んだので、この歌に免じて許してやったという話です。この話は、『宇治拾遺物語』だけではなく他に数種の説話集の中に出てきます。

この歌は、十一世紀初頭に成立の勅撰和歌集である『拾遺和歌集』雑下にも、以下のように採られています。

大隅守桜島忠信が国に侍りける時、郡のつかさ、かしら白き翁の侍りけるを、召しかんがへんとし侍りにける時、翁のよみ侍りける

老はてて雪の山をばいたただけどしもと見るにぞ身はひえにける

此歌によりて許され侍りにける。

この主人公である大隅守は、文治十三年の事桜島忠信という人物だということが明らかになっています。この人は、九六八年に備後権介になっており、その数年後の九七〇年代に大隅守に就任したと考えられています。

大隅国府で和歌が詠まれていたことは、この説話から知られていましたが、今から二〇年ほど前に大隅国府跡のけしき気色の杜遺跡（鹿児島県霧島市）から出土した土器の内側に連綿の仮名文字が書かれていました。字自体は、はっ

きりは分かりませんが、「ちとせはふともさきはひあれ□」という恐らくは和歌の下の句にあたるものが書かれているということで、大隅国府で和歌が詠まれていたという説話が現物として明らかになりました。年代的にも、そんなに遠く離れた年代ではなからうということです。

あとで話すことと関わってきますが、気色の杜遺跡からは炭化物が出土し、その年代測定が行われました。その結果、そこは十一世紀前半に火災に遭ったと考えられています。

iii. 大宰府と管内諸国の対立

また、この時期には大宰府と管内諸国が対立していたことも分かっています。これについては、聖心女子大学の佐々木恵介さんが大宰府の管内支配の変遷を検討した論文を書いています(佐々木恵介、二〇一八年「大宰府の管内支配変質に関する試論」『日本古代の官司と政務』吉川弘文館)。

表2のように、九九一年から一〇一四年までに五人の大宰大弐や帥がいますが、五人とも管内諸国と対立して辞めています。対立した相手は、宇佐八幡宮、豊後守、豊前守などです。つまり、大宰府も地元の国司たちも支配を強化しようとしたため、恐らく、競合関係に至っていたということです。大宰府官長は府官を手足として使い、管内諸国で積極的に土地を集めるようになり、また各国の受領たちも、国内支配の強

氏名		在任期間	原因	史料
藤原佐理	大宰大弐	991~995	宇佐八幡宮に訴えられる	『百鍊抄』長徳元・十・十八
藤原有国	大宰大弐	995~1001	豊後守と対立	『朝野群載』長保三・三・四 豊後守穴太愛親申文
平惟仲	大宰帥	1001~1004	宇佐神宮の神職・神人らの苛政上訴	長保五年八月十九日付宇佐宮司解
藤原高遠	大宰大弐	1004~1009	筑前守に訴えられる	『御堂』寛弘六・九・八
平親信	大宰大弐	1010~1014	豊後国守に訴えられる	『御堂』長和二・十一・十八

表2 大宰府管内の受領・寺社と対立して解任された帥・大弐

化に努めていました。

大隅国に關しても、『日本紀略』寛弘四年（一〇〇七年）七月一日条に、「大隅守菅野重忠すがのしげただ、大宰府に於いて、大藏満高くらつたかの為に射殺せらる。」とあつて、大隅守の菅野重忠が大宰府で大藏満高に射殺される事件が起こっています。菅野重忠の大隅守任命は寛弘二年（一〇〇五）のことですが、重忠は、大隅守になる前に既に大宰府と關係を持っていたことが、『御堂関白記』（藤原道長の日記）寛弘元年（一〇〇四年）二月九日条の「帥中納言の許より、重忠に付して消息有り。」などの記事から確認できます。大藏満高は、藤原純友の乱に追捕使となつた大藏春実の子孫でした。このように、中央の貴族たちの中にも大宰府に勢力を伸ばそうとしている人たちがいるという状況でした。

四．大隅国焼き討ち事件

i. 焼き討ち事件の経緯

そんな中で、最初に申し上げた二つ目の注目記事である大隅国府焼き討ち事件が起こります。これについてのまとまった史料は、『小右記』長元二年（一〇二九年）八月二十一日条です。ここには、この事件を受けて犯人を都に召喚するために発した以下のような太政官符の原案が載せられています。

太政官、大宰府に符す、応に早く使者に附して大監だいげん従五位下平朝臣季基并びに男散位従五位下兼光及び兼助等を召し進むべき事。

使右衛門案主笠孝良、従二人、火長一人。

右、右大臣宣すらく、勅を奉るに、大隅国、件の季基等国庁・守館・官舎・民烟并びに散位藤原良孝の住宅

を焼亡し、及び財物を掠取し、雑人を殺害するの由を言上す。仍りて勘糺せしむ。宜しく彼の府に仰せて管内に下知し早く使者に附して其身を召し進めしめよ者れば、府宜しく承知し、宣に依りて之を行へ。使者往還の間は例に依りて食・馬を給へ。路次の国亦宜しく此に准ずべし、符到らば奉行せよ。

右大弁源朝臣 左大史小槻宿祢

長元二年八月七日

ここには、「忖に早く使者に附して大監従五位下平朝臣季基並びに男散位従五位下兼光及び兼助等を召し進むべき事」と書かれており、島津荘の開発者と目されている季基とその子息が都に呼び出されています。

では、なぜ呼び出されたのかというと、「勅を奉るに、大隅国、件の季基等国庁・守館・官舎・民烟並びに散位藤原良孝の住宅を焼亡し、及び財物を掠取し、雑人を殺害するの由を言上す」、つまり、国の役所、国司の館などが焼き討ちされた経緯について大隅国から政府に報告があったということです。季基は大宰府の役人ですから、その罪を問いただすために、大宰府に対して、「都に送れ」という命令が出されました。

ただし、このあとの動きには曲折があったようです。『小右記』長元二年九月五日条にその経緯が書かれています。少し長いので、内容だけ紹介します。

大宰大式であった藤原惟憲は、事実上の大宰府のトップです。ここには、藤原惟憲は季基から絹三千疋余りを得て、大宰府解から平季基・兼助の名前を除いたと書かれています。

九州では大宰府が管内諸国を総管することになっていますので、各国からの政府への報告は大宰府経由で出さなければなりません。大隅国から都に提出する書類も大宰府を経由します。その際に、大宰府のトップである惟憲は、犯人の季基から贈られた三千疋の絹を懐に入れて、季基の名前を削った、つまり、免罪しようとしたと書かれています。

ます。『小右記』では、「惟憲は貪欲の者」と表現しています。

『小右記』長和二年（一〇一三年）九月十五日条には、「頭弁朝経、史守重を差して蜜々示し送りて云く、（中略）、守重は予の僕しもべなり。」とあって、館を焼き討ちされた大隅守船守重は、実資の家人、家来でしたから、恐らく、主人の実資に対して裏事情を洗いざらい打ち明けていたと思われれます。そこで、実資が頼通に対して裏事情を説明したため、実際の命令文書の中には季基の名前が載せられることになりました。惟憲や季基は裏でいろいろ画策しましたが、うまくいかずに都に召喚されることになりました。

ここで一つ付け加えておきたいのは、そういった問題がちょうど話題になっているときに、先ほど紹介したように大隅に住む藤原良孝が色草・小手草・赤木・檳榔・夜久貝を実資に贈っているということです。これは誰がどう見ても政治工作です。この時期、惟憲の上には頼通がいて、大隅守は実資の家人の船守重ですから、どうも二系統できているということになります。これについては、あとでもう一度触れます。また、先ほど紹介した気色の杜遺跡出土の炭化物は、この国府焼き討ち事件に関わる可能性もあります。

良孝が実資に夜久貝五〇個をプレゼントする前年の『小右記』長元元年九月七日条に「夜久貝冊余を前帥の使に付す。彼の消息有るに依りて之を送る」と書かれていますので、実資は前帥（藤原隆家）に四〇個の夜光貝をプレゼントしています。そのあと、大隅の良孝から五〇個の夜光貝が贈られてきているということですから、実資の手元には、常時、一定数の夜光貝がありました。夜光貝は大変貴重品ですから、上級貴族たちは譲ってほしいと考えますので、これも政治的な意味を持たせつつ、やりとりをしていることになるだろうと思います。

表3は『小右記』に見える南九州との関係をまとめたものです。上から二人目の延嘉のふしという人物は素性がよく分かりませんが、大隅掾じょうため為頼は、掾に任官する際に実資が口を利いています。薩摩守の巨勢文任こせのかみとうは実資の家人です。

先ほど名前を挙げた大隅守の船守重も実資の家人です。このように、当時右大臣だった実資は、自分の息の掛かった人を薩摩や大隅に送り込み、いろいろなものを都に送らせています。

では、焼き討ちをした季基はどうなったのか。『日本紀略』長元三年（一〇三〇年）正月二十三日条には、「大宰大監平季基を召し、左衛門陣に候せしむ。御物忌に依るなり。」と書かれていますので、季基は都に召喚されました。そして、尋問を受けたはずです。国府を焼き討ちすることは国家に対する反逆行為です。ちょうど同じ頃、関東では平忠常の乱が起こっており、忠常は追討されました。大隅国府焼き討ちは大変な行為だと思いますが、その翌年、『小右記』長元四年（一〇三二年）正月十三日条には「季基、雑物唐錦一疋・唐綾二疋・絹二百疋・を進む。」とあって、季基は実資のもとにプレゼントを贈っています。季基は処罰されていないことが分かります。惟憲も処罰されていません。

先ほど述べたように、大隅国をめぐって、関白藤原頼通―大宰大貳藤原惟憲―大宰大監平季基のラインと、右大臣藤原実資―大隅国守船守重―大隅国住人藤原良孝のラインという二つのラインがあって、これが競合していました。恐らく、季基の大隅国府焼き討ちは、個人的な利益のために襲撃したものでなく、大宰府の利益を代表して大隅国府と対決し、公務の中で起こ

	贈主	贈先	進物内容	備考
万寿2(1025).2.14	為頼	実資	檣籠200把	為頼は大隅掾
同年7.24	延嘉	実資	絹10疋	大隅に住む。相摸人の秦吉高に付す
〃	為頼	実資	絹15疋と牛鞆色革20枚	相摸人の秦吉高に付す
万寿4(1027).7.22	為頼	実資	絹20疋・色革30枚・5口	相摸人の秦吉高に付す
同年8.7	実資	為頼	栗毛馬1匹	馬は上総介慶滋が政が進上。相摸人の秦吉高に付す
長元2(1029).3.2	巨勢文任	実資	絹10疋・10斤・花3帖・革10枚、(子女のために)粉帛10帖・茶堦・唐硯1面	
同年8.2	藤原良孝	実資	色革60枚・小手革6枚・赤木2切・檣籠300把・夜久貝50口	大隅に住む
同年8.3	巨勢文任	実資	紫草	

表3 『小右記』に見える南九州との関係

た事件として処理されたのではないかと思われず。

政治工作として品物を贈った藤原良孝については、よく分からないところも多いのですが、私は、良孝は国司として赴任後大隅国に土着し、散位とはいえ、国衙内部に一定の地歩を持ったかなり有力な人物だったのではないかと考えています。一方、東洋大学の森公章さんは、在地性の強い任用国司あるいは在庁官人クラスの人物ではないかと言っています（森公章、二〇一九年「真上勝岡異見」『東洋大学文学部紀要』第七十二集（史学科篇四十四号））。これについては、今後、検討を深めていかなければならないと考えています。

良孝の子孫にあたるのではないかと考えられる藤原頼光という人物が所領を子どもたちに譲った際に作った治暦五年（一〇六九）正月二十九日付の所領配分状が残っています。（『禰寝文書』）。それを表4にまとめました。これによると、大隅管内のあちこちの所領を譲っています。恐らくは、大宰府に納めるべき税を納められない人の代りに税を納める形で所領を集積していったのではないかと考えられます。

地元では、こういう有力者も登場してきている中で、季基らが動いています。先ほどの焼き討ち事件は、政治工作が行われたり、太政官符が作られたのが一〇二九年ですから、恐らく、その前年に起こった事件ではないかと考えられます。

隣の日向国で島津荘ができたのが一〇二四年から一〇二八年の間です。それは季基が開発したとされていますから、その同じ人物が大隅国に手を伸ばそうとしているということ、これは島津荘を大隅国に拡大する動きとして理解できるの

相続人	相続させる所領
頼経	禰寝院内三村（大禰寝・濱田・大始娘）、桑東郷の田畠
頼利	贈雄都の所領田畠
権大掾頼貞	禰寝院内三村（田代・志天利・佐多）
女子	小川院の所領田畠
弟頼重	吉田院の所領田畠
弟女	桑西郷の所領田畠

表4 藤原頼光所領配分状案にみえる所領

ではないかと考えます。

五. 島津荘成立の契機

i. 荘園成立の契機について

荘園がどのようにできるかについては、私はもともと古代史の専門ですので、中世の荘園成立論はよく分からないところがあります。今日話さなければいけないので、ここ二カ月ぐらいろいろと勉強しましたが、やはり分かりませんでした。

簡単に言うと、寄進を軸にして「下から」荘園は造られていくという「下からの」荘園制論と、荘園領主のほうで開発して荘園を造り上げていくという「上からの」荘園制論があります（鎌倉佐保「荘園制と中世年貢の成立」〔岩波講座日本歴史〕第六卷（中世一）二〇一三年）。

そうした中で、大隅国でそんなことがあったかどうかは全く分かりませんが、十一世紀初頭には国衙の荒廢公田開發奨励政策などが出されることもあったようです（寛弘九年（一〇一二）正月二十二日付和泉国符案）。つまり、荒れ果てた田を再開發する。これは国司主導、受領主導でそういうことが行われていたということです。

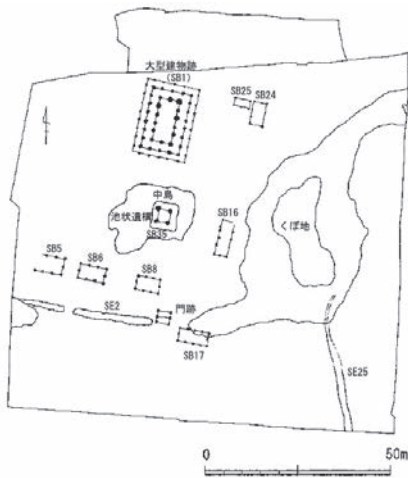
ですから、大隅国あたり、あるいは日向国あたりでも十世紀の末から十一世紀にかけて、受領を中心とする開發の動きがあった可能性はあります。それに対して、大宰府も同じような動きをしている。そこで競合関係が生まれることになります。

ii. 考古学から見る都城盆地

考古学から見る都城盆地について、少し紹介をしておきます。都城盆地は島津荘が最初に成立した場所です。ここにもう十数年前ですが、国の史跡に指定された大島田遺跡（都城市金田町）があります。これは、古代から中世の大型建物を含む非常に面白い遺跡ということで、調査されてからそれほど時を経ずに国の史跡に指定されています。

写真5は、最近、公園として整備されている様子です。この奥に見えるのが、高千穂峰という霧島連峰の中で最もきれいな山です。それを見晴らせるような所に大島田遺跡は立地しています。図4は十世紀はじめころの遺構配置図です。大型の建物があって、池状遺構の中に建物が建っています。お堂の可能性があるという話です。大型建物は、日向国の国庁の一番大きな時代の正殿と変わらなくらいの大きさで、国の役所と同じぐらいの建物が建っているということです。

大島田遺跡は、最初のうちは公的機関で、そのあとには有力者の居館という性格に変化していくのではないかと考えられています。大島田遺跡は十世紀の半ばぐらいで終わります。島津荘が始まる十一世紀にはもうありません。



居宅形成段階の遺構群
(谷口・福田, 2008より転載・加筆)

図4 10世紀初めの大島田遺跡の遺構配置図



写真5 大島田遺跡

都城市に榎畑光博さんという大変優秀な考古学者がいて、この辺りの時代と、火山灰を用いた考古学研究で全国的に名前を知られている人です。この人が都城盆地の遺跡分布を調べています。

図5は「都城盆地における奈良・平安時代の時期別遺跡分布」（榎畑光博 二〇〇九「島津荘の成立をめぐる諸問題」『地方史研究』三四一号）です。八世紀から九世紀にかけての遺跡数は、九世紀から十世紀にかけて急激に増えています。開発が進みました。ところが、十一世紀になると急激に数が減っています。八世紀、九世紀、十世紀はどんどん増えていって、そのあと急激に減っていった、そのあと、再び遺跡が形成され、十二世紀になると遺跡数は急増していきます。遺跡数が急激に減った状況が「無主荒野の地」になっていたという話ではないか。

実は、この無主荒野の地は、荘園を建てるときの常套句であるというような理解がありました。つまり、誰かのものを奪って荘園にするわけにはいかないので、そこは誰のものでもない土地（無主荒野の地）なので、それを開発して荘園にしていくということで、「荘園を造る際の常套句ではなかったか」と言われていました。しかし、榎畑さんの研究によると、「いや、あながち常套句ではなくて、実際に荒廃していたのではないか」ということになります。

二〇一七年に都城市で郡元西原遺跡と言う遺跡が調査されました。新しい道路を造って都市街化整備をしていくための調査でした。ここから、図6（都城島津邸編 二〇二三年）のような方形の居館が出てきました。これが大体十一世紀の後半ぐらい、島津荘ができて少しぐらいの時期にこういうものが造られていることになりました。

この居館が見つかった場所について、図7「一万城扇状地における平安時代の遺跡分布」を見てください（榎畑光博 二〇二一「島津荘の成立から拡大期における遺跡の様相」岩永省三先生退職記念論文集『持続する志 下』中国書店）。実は、ここに祝吉御所跡（島津忠久屋敷跡の伝承地）があります。伝承的には、島津氏がここに居た

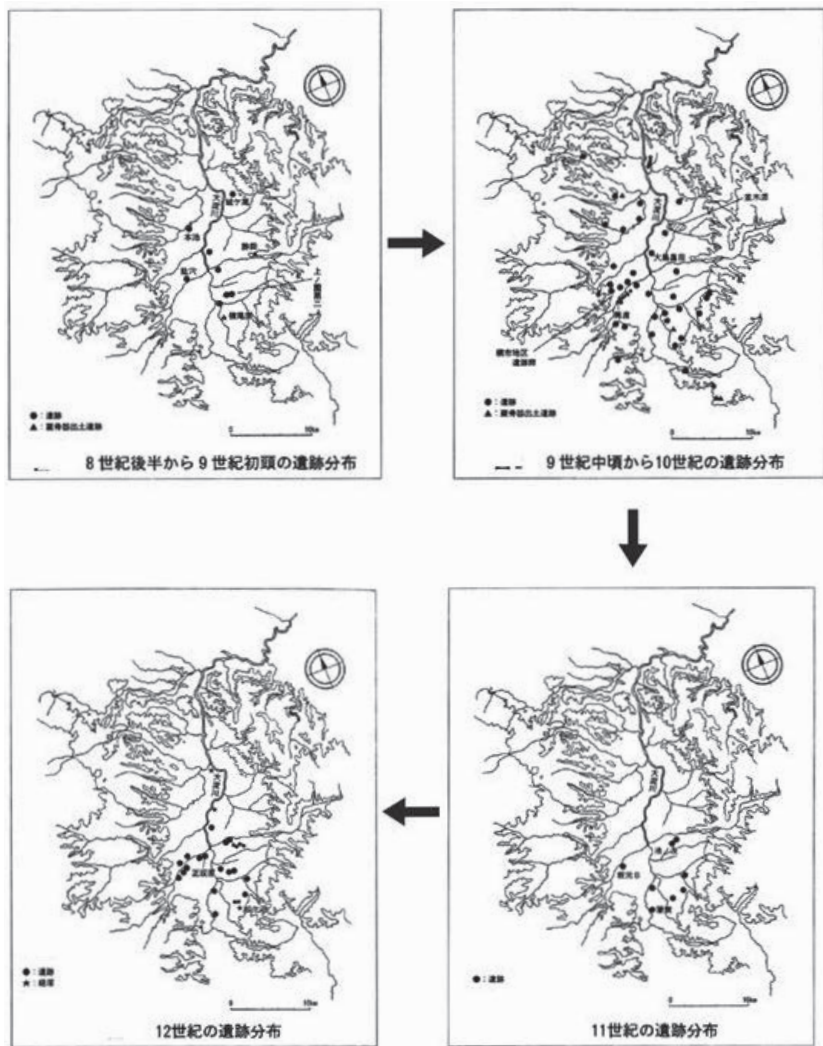


図5 都城盆地における奈良・平安時代の時代別遺跡分布

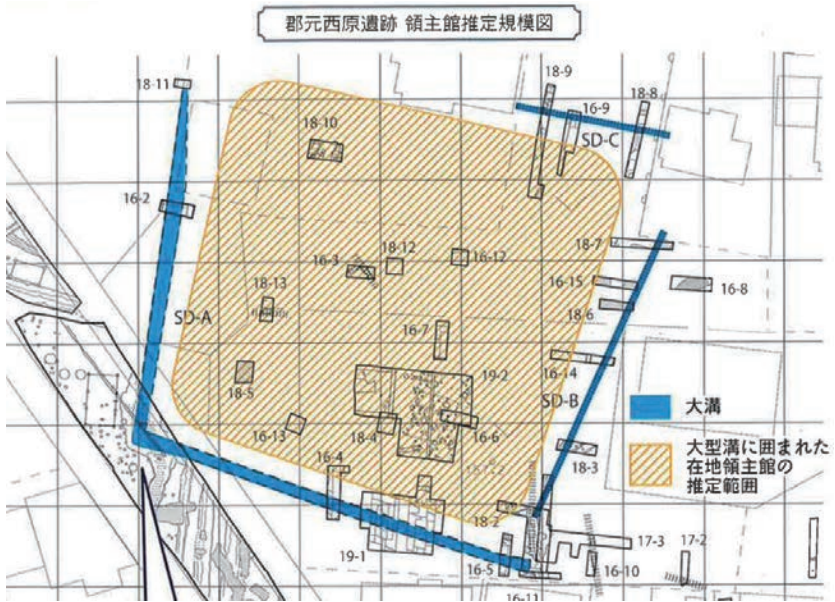


図6 郡元西原遺跡 領主館推定規模図

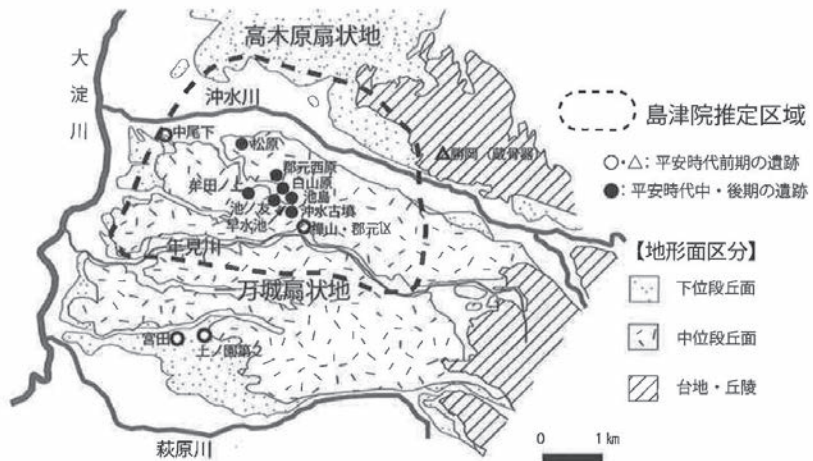


図7 一万城扇状地における平安時代の遺跡分布

という場所で、先ほどのような居館が見つかりました。

この点線で囲まれた部分（島津院推定区域）が、島津荘がスタートしたエリアではないかと考えられている場所です。しかし、この中はほとんど開発が進んでいなかったのではないかと。だから、この場所を平季基が開発していったのではないかという筋書きを乗畑さんは考えられています。

これは地元の話になって申し訳ないですが、都城という所は考古学の発掘に大変熱心な所で、考古学の職員だけで、多いときは十人ぐらい居ました。細かい所まで本当によく調査をしています。これだけかなり綿密に調査されている中で、恐らくは、十一世紀頃、都城盆地全体で遺跡が減って無主荒野の地が拡大するなか、開発が及んでいない一万城扇状地に手を付けて、そこが島津荘のスタートになっていくのだろうという説は説得力がかなりあると考えているところです。（なお、二〇二四年六月二四日、文化財審議会は、郡元西原遺跡を国史跡大島畠田遺跡に追加指定し、名称を「大島畠田遺跡 附 郡元西原遺跡」に変更するように文部科学省に答申しました）

iii. なぜ万寿年間か？

島津荘の成立がなぜ万寿年間であったかということについては、実は、誰もあまり答えていません。いわば、大式惟憲の個人的な事情によって、季基が送り込まれたのではないかという話です。それに対し、熊本学園大学の小川弘和さんは『中世的九州の形成』（高志書院 二〇一六年）という本の中で、次のように述べています。

寛仁三年（一〇一九年）の刀伊との事件（刀伊の入寇は）（は）では、刀伊（女真族）が九州などに攻めてきて、九州で激しい戦いがありました。これが九州の武士が台頭していく一つの重要な契機にもなっています。そして、この翌年に、先ほど紹介した二度目、あるいは三度目かもしれませんが、南蛮襲来事件が起こっています。

こういった刀伊事件とか南蛮襲来事件は、恐らくは、大宰府を中心にその鎮圧が図られました。それは、周辺地域治安維持の軍事態勢強化に支えられつつ、交易・外交の管理窓口機能を確立するためのものでもあり、南九州を場とする南島交易についても、大宰府主導の秩序形成と交易体制管理の必要を強く意識させる契機となったのではないか。

南島交易が大きな焦点になっているような時期でもありませんので、それを大宰府が直接管轄するといったような流れの中で、南九州に支配を広めようとしていったのではないかということの小川さんは述べています。まだ細かいことをいろいろ考えなければいけないのかもしれませんが、一つの考え方としては、なるほどと言える内容だと思っています。

おわりに

島津荘が成立したころの南九州から南島にかけての動きを概観して、今日の話を終わりたいと思います。

i. 大隅正八幡宮八幡宮領の成立

島津荘の成立とほぼ同じ頃に、大隅正八幡宮領が登場してきます。大隅正八幡宮は『延喜式』では鹿兒島神社として出てくる神社になります。鹿兒島神社の「鹿兒島」は、今は鹿兒島市とか鹿兒島県と言う自治体名にもなっていますが、もともとは桜島のことだそうです。ですから、鹿兒島神社は本来桜島を祭る神社でした。

「石清水宮御璽營事」紙背文書には、「元命 大隅八幡別宮知府宣 長元七年」とあります。元命は、宇佐から出

て石清水八幡宮のトップに立った人物ですが、これが長元七年に大隅八幡別宮を管轄することになります。つまり、鹿兒島神宮が大隅正八幡宮になって、八幡神化したことがわかります。

この八幡神化した理由については、鹿兒島大学の日隈正守さんが、二つの要因を挙げています。一つは、南蛮襲来事件です。もう一つが、国府焼き打ち事件です。つまり、八幡というのは基本的に武の神様ですので、国府が中心になって武の神様を勧請するという動きが出てくるのではないかとということになります。

「桑幡家文書」暦応二年（一二三三）十一月 日付正八幡宮講衆・殿上等訴状写という史料は、桑幡家という大隅正八幡宮の社家が伝えている、しかも一三三九年というだいぶ時代の下った史料ですが、それには「去る長久年中に国司、始良庄をもつて御宝前に四季転説大般若教の供料所として寄せたてまつるの処」とあって、国司が始良庄を正八幡宮に寄進しています。しかも、始良庄は平季基の弟良宗が開発したものではないかとされており、兄弟の中でも政治的な立場が違ったようです（日隈正守 二〇一四「大隅正八幡宮領の形成過程」『古代文化』第六六卷第二号（通巻五九七号））。季基は大宰府、良宗は国府に就くということ、その後の大隅国内の動きは、この島津荘の動きと大隅八幡宮領の動きという、大きな二つが絡み合いながら展開していきます。

ii. 高麗・宋との関係

『日本紀略』長元七年（一〇三四年）三月条には高麗人の大隅国漂着記事、『百鍊抄』永承六年（一〇五一年）七月十日条には日向国の女の送還に関するには高麗国牒状に関する記事、『日本紀略』康平元年（一〇五八年）閏十二月二十七日条には大隅国に流来した唐人守道利の殺害事件に関する記事、『高麗史』文宗三十四年（一〇八〇年）閏九月庚子条には、日本国の薩摩州からの使節と方物献上記事などが見えます。

十一世紀の中期から後期にかけては、高麗人とか宋の人がやってくるといったことで、南九州は対外的な関係の中でも顔を出すような状態が生まれてくることになります。

iii. 南島の展開

鳥津荘が成立する頃、南島で新しい歴史的展開が見えます。

その前提とも言える変化が、北部九州で起こっています。鴻臚館から博多遺跡群へという展開です。これは有名な話ですが、大宰府鴻臚館が十一世紀の半ばぐらいに廃絶して、そのあと博多遺跡群が中心になっていきます。この博多遺跡群は、住蕃貿易の拠点であり、宋の商人たちのコロニーが造られていて、宋の商人たちが積極的に動き回って交易を行っていき、それが南島にも関わってくるようになります。

十一世紀の半ば頃、徳之島でカムイヤキという焼き物が作られ始めます。このカムイヤキは、私は「カムイヤキ類須恵器」と書いていますが、もともとは「類須恵器」とか「南島産須恵器」と呼ばれていたものです。それが一九八〇年代に、徳之島の伊仙町で窯跡が見つかったために、その場所にちなんで「カムイヤキ」と呼ばれることになりました（二〇〇七年に徳之島カムイヤキ陶器窯跡として国指定史跡に登録されています）。

カムイヤキは、常滑・渥美両窯（愛知県）、珠洲窯（石川県）、東播諸窯（兵庫県）と並んで四大広域中世陶器の一つとされています。その分布域は、沖縄県の波照間島から鹿児島県出水市まで分布するとされていますが、一年ほど前、九州新幹線長崎ルート工事の事前調査で、長崎県大村市の竹松遺跡という遺跡が調査され、この遺跡でカムイヤキの破片が幾つも確認されました。カムイヤキの製造技術は、どうも高麗の無釉陶器の影響が強く、朝鮮半島の技術で焼かれているものだと考えられています。

またこの頃、南島には滑石製の石鍋が大量に流入してきます。滑石製石鍋は、石焼きビビンバの鍋みたいなものです。取っ手の部分がつまみになっている縦耳型のもと、ぐるりと鑊が一周する羽釜型があります。南島で出土するのは、基本的に縦耳型と呼ばれるものになります。縦耳型は十一世紀が中心と言われていましたが、最近はそのさかのぼるようですので、十世紀から十一世紀に南の島にこういったものが大量に入ってきていることになります。そして、十一世紀の半ばぐらいに城久遺跡群が最盛期を迎えます。写真6はこの時期をいろいろな意味で象徴するもので、小ハネ遺跡で検出された土坑墓です。そこから検出された遺物を見ると、まずカムイヤキの壺があります。次に、玉縁口縁白磁です。太宰府分類のⅣ類と呼ばれる貿易陶磁になります。さらに、ガラス玉があります。これは奈良文化財研究所のガラスの専門家である田村朋美さんの分析によると、鉛ガラスであって、その鉛の成分分析から対馬の鉛を使っており、このガラス玉自体は大宰府近辺で作られたものが南島に入ってきているのではないかと考えられます。

そして、大ウフ遺跡からは輔の羽口が出土しています。この頃製鉄を行っているのは、南島では喜界島の城久遺跡群だけです。ここで造られた鉄が南島にどんどん流入していくと、その鉄製品を使って農耕が始まっていくのではないかとということ、琉球列島の中の農耕の始まりと城久遺跡群の関わりは深いものがあるのではないかと話も出ています。

DNAを使った分析によると、南九州とか九州の人たちが南島に大量に移民していき、どうもこれによって農業も始まっていくのではないかと。先ほど見たカムイヤキについても、そのような移民してきた人たちに供給するための器ではなかったか



写真6 小ハネ遺跡土坑墓

という説も出されています（池田榮史「琉球列島史を掘りおこす」中世学研究会編『琉球の中世』高志書院 二〇一九年）。

写真7は、喜界島の「五つのカメ伝説」に関わるもので、今から二〇年ぐらい前、喜界島の一番北にある小野津という集落の八幡神社の片隅にあった扉が壊れた祠の中に納められていた三個の陶磁器を撮ったものです。

亀井明德さんの鑑定によると、青瓷刻花文水注（北宋越州窯 十二世紀前半）・褐釉双耳注口付壺（中国福州付近の窯 十一～十二世紀前半代）・須恵器双耳長胴瓶（十一世紀後半～十二世紀）となり、いずれも十一世紀とか十二世紀とかの非常に貴重なものであったということで、今現在では町のほうで保管して町の指定文化財になっています。中国の人たちもここに関わってきているということが明らかです。

iv. 交易品としての硫黄―イオウガシマの登場

最後に交易品としての硫黄の問題について触れます。大体十世紀ぐらいから硫黄が中国に輸出されていたらしいですが、十一世紀の後半に入ると北宋とその西にある西夏などとの戦いの中で、中国側の硫黄需要が増えました。中国では硫黄はなかなか取れないので、日本からの輸入をはかり、正式に宋商人の船団が日本にやってくるようになります。『統資治通鑑長編』卷三四三・神宗・元豊七年（一〇八四年）二月丁丑条には、明州の長官が、政府の命令で商人を募り日本国に於て硫黄五〇万斤（約三〇〇トン）を購入するために、一〇万斤毎に一網（商人集団）、合わせて五網を派遣する記事があり、『朝野群載』卷五、応徳二年（一〇八五年）十月二十九日付陣定文には、大



写真7 小野津の「五つのカメ」

宰府が宋の商客が来日を報告し、これに対する政府の対応を載せています。(山内晋次『日宋貿易と「硫黄の道」
山川出版社、二〇〇九年)

二〇一八年に行われた博多遺跡群の調査で、十一世紀後半から十二世紀初め頃に使用されたと推定される港湾施設
の石積遺構が出土し、その海渚側から複数の硫黄の小塊が検出されました。これらの硫黄塊は、日宋貿易の輸出品
で荷積みする際にこぼれ落ちた「かけら」とされ、安定同位体比分析によれば、大分県くじゅう硫黄山、塚原・
鍋山地域などを産地とする一群と鹿児島県の薩摩硫黄島を産地とする一群が混在していることが明らかになりました
(大庭康時編『博多津』福岡市埋蔵文化財調査報告書一四六八集 二〇二三年)。

薩摩硫黄島が、硫黄が交易の一つの重要な拠点になっていき、その後も硫黄交易がどんどん盛んになっていくこ
とになります。そうになると、イオウガシマは、キカイガシマと並ぶ重要な名称となっていくきます。そして、それに
隣接する南九州への関心もさらに一層高まっていくのではないかと考えられます。恐らく、島津荘の拡大とか大隅
正八幡宮の拡大と、こうした対外交易の活発化は密接に関わるところがあるのではないかと思うところです。

以上で私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。(終了)

(本稿は、講演内容を一部要約、修正したもので、使用した史料を本文中に入れ、図版・写真・表は一部のみを利
用した。)

〈キーワード〉

島津荘 南島交易 南蛮襲来事件 キカイガシマ 大隅国府焼打事件